

言語活動をコアとして演奏表現と鑑賞を一体化させる授業プランの模索 ー IC レコーダーを「音楽の鏡」として小中学校教員と積み上げた実践ー

愛知教育大学 新山王 政和

1. 研究の背景と問題点の整理

1.1 研究の背景

小中学校の音楽科授業では歌唱と合唱を中心とした演奏表現の活動が多くを占め、筆者が毎年度約 100 例収集する実践報告に占める鑑賞を取り上げた事例の割合は、H23 年度に 18.6%、H22 年度は 12.9% しかなく、極めてバランスを欠く状況にあった。しかし「演奏とは聴き合わせることであり」と言われるとおり、音を出すことと聴くことは可逆的かつ不可分なものである。その重要性については國安愛子氏によるレビューが参考になるので、その中から特に筆者が注目し、今回の一連の研究にあたって実践協力者とも情報共有したポイントについて記しておきたい。(國安愛子『情動と音楽』音楽之友社 2005 より筆者が抜粋要約)

- ①音楽の聴き取りは脳全体の多数の領域が総合的に関連して処理している。
- ②音楽を集中して聴いている時、左半球の聴覚野は約 25% 多く反応している。
- ③家庭でよく音楽を聴いている子どもは、3 歳上の子どもと同じ水準で脳の聴覚活動が活発である。

さらに、「音響情報の聴き取りは側頭葉で処理(略) + 体を動かすのは運動神経が処理(略) ⇒ 音楽と体の動きを同調させながら聴くと、感覚神経と運動神経が視床下部で同期する」(筆者要約) とある。

これを補足する報告として佐藤正之氏によるものを紹介しておきたい。「伴奏とメロディーの聴き分けは側頭葉下部と後頭葉の境界部(略)、ピッチの高低の比較には頭頂葉と前頭葉のネットワークが関与(略)」と報告しており、音楽を聴きながら動作を行う際には脳全体が連携して活性化していることがわかる。(佐藤正之「音楽はどのように脳にとりこまれるか」ヤマハ音楽研究所 ON-KEN SCOPE より筆者が抜粋要約)

これらは筆者がこれまで提案してきた「“聞く”(門の前で耳を敬っている)から“聴く”(14 の心で耳にする)への意識転換」を後押しし、「鑑賞＝狙って音や音楽を拾いにいく“聴くという行為”」という視点と、筆者が模索している「静かに座って音楽を聴くスタイルの鑑賞活動から、演奏しているつもりになって能動的に音楽を聴きにいくスタイルへの転換」を支持していると言えよう。

これを整理すると、他者や自己の演奏表現上の違いを聴き取れるから表現が幅広く豊かになり、表現の技術や知識があるからこそ演奏上の変化を聴き取ることができるのだと考えられる。そこで今回の一連の研究では、“言語活動”をコアとして演奏表現と鑑賞を一体化させた活動によって、音の塊や音の羅列へ自分なりに音楽的意味や価値を付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考・判断し、それを言語活動によって他者との共通理解に高めた上で再び表現活動や鑑賞活動へ還元する実践を、本学附属学校4校および筆者が関わる現職教員授業研究会と連携しながら模索した。

なお、ここで言う「音や音楽を形づくる要素や仕組み（以下、音楽構成要素）」とは、演奏表現のみならず鑑賞活動の際も同じように作用している。事実、筆者が中学校の先生方と取り組んだ先行実践では、「まず自分なりに感じ取ったり聴き取ったりしたことをグループ内で話し合い、それを互いに確認し合い疑問を投げ掛け合うことで熟成化させ、全体の前で披露し合う活動によってより確かな意見にまとめる。このような活動を通して生徒は曲を分析する力や聴取力を身に付けるプロセスを体験し、それが他者へ伝える表現力や文章力にも繋がっていったものと考えられる」という方向で集約されている（拙著『改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る！』Stylenote,2010,p92）。この結果を受けて、全ての音楽活動を貫く基盤とは、「知覚し、聴き取り、聴き分けること」であると考えられる。そこで、演奏表現と鑑賞を一体化させ「演奏しながら〇〇に気を付けて聴く。演奏しているつもりで〇〇の変化や工夫を聴き取る」のように、音楽構成要素を触媒として演奏と鑑賞の活動を融合させるような活動を探ることとした。

1.2 研究構想時に指定した鑑賞で求められる音楽構成要素を知覚する力

音楽構成要素を学ぶには、それ以前に各要素へ充分浸らせて無意識下で音を感じながら音へ反応させる様々な原体験や前体験が行われていなければならない。この“質の良いあそび”によって芽生えた知覚力を手がかりとして音楽構成要素に気づかせ、感じ取らせて意識させるプロセス、つまり音響現象と各要素を結び付けて、その良さや働きを体感させて自覚へ高める活動によって身に付ける基本的な鑑賞の力を次の5点に絞り込んだ。

- ①聴き方のパターンや型を知る。つまり「音楽を聴くためのデータベース」
- ②聴く力、気づく力、感じ取る力。つまり「音楽を捉えるためのセンサー」
- ③分析し想像する力、音楽的嗜好を巡らせる思考。つまり「プロセッサ」
- ④作曲者の周到な作戦を推理する力。
- ⑤制約の中で工夫された演奏表現を推理する力。

この5つの力を身に付けるプロセスを次の4段階に指定した。

- ①自他の演奏を聴いて音楽構成要素に気づき、感じ取って意識する段階。要素を知覚し認知する力や、要素を聴き分ける力を身に付ける。

- ②自他の演奏を比較して聴いたり、自身の練習前と練習後の演奏を聴き比べたりして、その良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする段階。要素を活用して演奏表現や鑑賞の活動を工夫する力を身に付ける。
- ③要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える段階。全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力を身に付ける。
- ④気づき感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語活動を活用して共通理解へ高め演奏へフィードバックする段階。演奏者相互の説明力や説得力を身に付ける。

この4段階のプロセスを経ることにより、音楽に関する知識と技術を音響現象としての音とマッチングしたり、音楽と結び付けたりすることで、実感を伴って意識化させることが可能となる。つまり「○○を△△な感じで表現するにはどのように演奏すればよいか」を、模範的演奏を聴く鑑賞とリンクさせることで自らの演奏へ置き換えて考えさせ、自らの演奏表現を工夫する活動を通じて気づき感じ取らせて意識させることで演奏者本人の自覚を促し、「知識として知っているけど、それを音で表現する方法が分からない」という状態からの脱却を促すことへ繋がっていくと考える。

ここで確認しておきたいのは、音楽構成要素、つまり音の正体（音色、ピッチ、強弱）や音楽の仕組み（音の並べ方＝リズム、音の繋げ方＝旋律、音の重ね方＝ハーモニー）を知っていて、それを自在に使いこなせる技術を持っていなければ、より高いレベルでの音楽活動には繋がらないということである。なぜなら、演奏者が自らの思いや意図を具現化するために試行錯誤した演奏上の工夫に対して、レベルの高い鑑賞者（聴取者）であればその演奏上の工夫や試行錯誤を読み解き演奏者の思いや意図を予想し推察することで自らの音楽表現上の嗜好と照らし合わせながら聴き、さらに自らの音楽表現上の欲求を鑑賞活動を通してバーチャルに具現化することを楽しんでいるからである。よって、より高い芸術性や情緒・情操の育成をめざす上では演奏者を育てることと鑑賞者を育てことは同義であり、不可分な関係にあることが分かる。つまり音の正体や音楽の仕組みを知っていてそれを操作する力（演奏表現の力）とは、音の正体や音楽の仕組みを聴き取る力（音楽鑑賞の力）と表裏一体の関係であり、「演奏する力＝聴く力」であることから「音を出すこと」と「音の違いを感じ取ること」は深く結びついていることを、活動や体感を通じて子ども達へ理解させることが最重要になる。

1.3 研究構想時に措定した音楽科授業における言語活動の位置付け

筆者は、音楽科における学びの一つを「音楽に関する知識と音響的な実体とを関連付け、体験を通して実感すること」と措定している。そして音楽科における言語活動とは、言葉や会話、記述などを介在させた音楽に関するコミュニケーションであり、音楽構成要素を巧く組み合わせて表したい思いや意図、演奏表現の工夫などを言葉に置き換えて他者と共通理解化したり、曲を聴いて感じ取り聴き取ったことを他者と話し合い比べたりすることだと考えている。つまり、相互に意見や疑問を交わす活動を通じて、子ども達は分析的に音楽と向き合う力を身に付け、さらに他者の演奏の違いや良さを聴き分ける力を身に付けることで、演奏表現に対する自らの思いや意図を熟成させ、それを他者へ伝える表現力や説明力を身に付けることへ繋いでいく活動、このような音や音楽から聴き取ったことを言葉と関連付けたり、感じ取ったことを言葉へ置き換えて説明したりする活動を、小中学校9年間に亘って積み上げることをめざして研究を構想した。

これについては、岡田暁生氏による示唆が参考になるので紹介しておきたい。(岡田暁生『音楽の聴き方』中公新書 2009 より筆者が抜粋要約)

- ①聴くことと語り合うことが一体になってこそ音楽の喜びは生まれる。
- ②音楽を語る言葉を磨くことは十分努力によって可能になる～略～音楽の語り方や聴き方には確かに方法論が存在する。
- ③純粋に非言語的な音楽体験というものは存在しない。
- ④コンサート後のあの「一言」がもたらす喜びは、音楽を聴いている最中のそれに勝るとも劣らない感興を与えてくれる。
- ⑤大多数の人にとって音楽を聴く最大の喜びは、他の人々と体験を共有し、心を通わせ合わせることにある。

2. 今回の一連の研究の目的と、筆者のめざす鑑賞活動の在り方の整理

2.1 研究の目的

本研究の目的を、次の3点に整理する。

- ①現代社会で希薄になっている「聴く」ことを大切に触媒とし、演奏表現と鑑賞が相互作用的に一体化した活動によって、音の塊や音の羅列に音楽的意味や価値を自分なりに付加しながら感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを思考・判断し、それを言語活動によって他者との共有化・共通理解化へ高めた上で再び演奏表現や鑑賞の活動へ還元していくような授業プランを模索し、その有効性と限界を検証すること。つまり「演奏⇒聴く(気づく)⇒考える(意識化)⇒問題解決(自覚化)⇒演奏へ結び付ける」というスタイルによって演奏表現と鑑賞の活動を効果的に融合させる授業プランを検討する。

- ②演奏表現や鑑賞の両方の活動において、子ども達の意識を音楽構成要素へ向ける指導を適切に行っていると、子ども達は多様な音楽の言葉を用いることができるようになることを確認する。従来、言語活動に対する理解の不足や言葉上の狭義な解釈から実践されてきたCDやDVDを聴取しながら作文をさせる活動から脱却し、音や音楽を形づくる要素へ注目させ、感じ取って聴き取らせたものを意識化させて子ども達自身の演奏へと結び付けたり、自分達の演奏やプロ演奏家の模範演奏と比較することで気づいた演奏上の工夫を自分自身の演奏へ取り入れて活かしたりするような、演奏表現と鑑賞を相互作用的に一体化させた活動を追究することで「音楽活動と言語活動のバランス」を適切にコントロールし、「思考・判断、学び合い、共働・共創」に支えられた音楽科における言語活動の在り方や音楽科ならではの言語活動へ繋げていくような授業プランを検討する。
- ③実践協力を依頼した愛知教育大学附属学校4校の研究大会、および筆者と係わりのある授業研究会等において、本研究で模索した授業プランや研究授業などを報告することで一般教員に対する情報提供や情報共有を図り、「思考・判断⇒共通事項に示された音や音楽を形づくる要素や仕組みを適切に用いた言語表現の活動」や「学び合いや共働・共創に支えられた音楽科の授業づくり」の在り方に関する議論を促進する。

2.2 今回の研究において筆者がめざした鑑賞の在り方

これまでの検討事項を踏まえた上で、今回の一連の研究において筆者が求める鑑賞の活動スタイルを次のように措定した

- ①鑑賞には思考の働きかけが不可欠であると考えられることから、裏付けを伴わない詩的な聴き方や過度に物語的に偏った聴き方をやめる。
- ②音の塊や音の羅列に音楽的意味や音楽的な価値を付加し、感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを探ったり、それらを感じ取ったりすることのできる活動をめざす。
- ③自らの音楽的要求や表現的な要求と照らし合わせながら聴く。
- ④聴き方の型や聴き方のパターンを知り、それを身に付ける。
- ⑤作曲者が工夫した作戦を推理し分析する力と、聴き取る力を身に付ける。
- ⑥演奏者が工夫した作戦を推理し分析する力と、聴き取る力を身に付ける。

3. 研究の進め方

筆者と研究交流のある小中学校へ共同研究の形で研究実践を依頼し、研究実践を積み重ねるとともに、そこで得た成果を研究大会や授業研究会で報告することで、音楽科専門教員のみならず一般教員に対しても情報提供を行い、情報の共有共通理解化を図った。これにより、言語活動を核として鑑賞と表現を相互作用的に一体化した音楽科の授業づくりについて、その在り方や有効性、是非に関する議論を促し、音楽科授業に関する意識改革を喚起することができた。

なお本学附属学校では独自の実践や活動を試行することを目的として研究を推進することが多かったが、今回の一連の研究においては本研究のコンセプトに従って共同研究の形で取り組むことにより、一般校で取り扱いが難しいと言われている「鑑賞の授業化」に対して一般校の教員と同じ目線に立って向き合うことで、より汎用性の高い研究実践を進めて頂いた。これは、あたかも「誰も知らない調味料と素材を用いて、誰も持っていない調理道具で作った特別な料理」を誇示するかのような「附属でしかできない実践」からの脱却をめざすこととなった。具体的には一般校でも入手可能なスピーカー一体型のポータブル IC レコーダーを、グループやパート単位で録音再生して自らの演奏表現を確認できるよう複数台準備し、演奏表現と鑑賞の活動を相互作用的に一体化できるのか、その可能性や限界を検証し、一般校への応用性や有効性を報告し合うことで、附属学校と一般校の垣根を越えた情報共有と意見交換を重ねる取り組みとなった。

3.1 研究実践の協力校および協力者

筆者と研究交流のある小中学校へ共同研究の形で研究実践を依頼し、研究授業と協議を積み重ねた。依頼先は次のとおりである。

- ①愛知教育大学附属名古屋小学校（吉松頼美・加藤幸子・富所妙子・野田英里子・渡辺あす香）、附属名古屋中学校（石川翼・井垣智恵・松本亜由子）

名古屋地区の附属学校では、IC レコーダーを子ども達がどこまで活動の中に取り込んで自発的に活用することができるのか、その可能性や限界の検証に取り組んだ。研究実践は現在も継続中である。

- ②愛知教育大学附属岡崎小学校（小野行俊・太田理恵）、附属岡崎中学校（矢崎佑）

「生活の中に学びがある。子ども自らが課題を発見し問題解決に取り組む」という「生活教育」をコアとして研究を推進してきた岡崎地区の附属学校では、子ども達が自ら課題を発見して自ら学びを構築する学習過程の中で、「音楽の鏡」としての IC レコーダーが自らを客観視する「機会・きっかけ」としてどのくらい有効な教具・教材になり得るのかを検証した。

- ③稲沢市教育研究会音楽部会（大津隆・吉田奈々・滝藤友美・長橋正幸・渡邊美佳・横谷香奈子、他 31 名）
H25 年度愛知県小中学校音楽教育研究大会をめざして本研究に係る研究会を 8 回開催し、その成果は研究大会で報告された。研究実践は現在も継続中である。
- ④西春日井地区教育研究会音楽研究部（丹羽裕子・小出芳子・山本由佳、他 14 名）
H24 年度尾張教育研究会愛日支部音楽部門研究集会をめざして本研究に係る研究会を 5 回開催し、その成果は研究大会で報告された。
- ⑤小牧市教育研究会音楽部会
H27 年度尾張教育研究会愛日支部音楽部門研究集会に向けて本研究に係る研究会を 3 回開催し、研究実践は現在進行中である。
- ⑥岡崎市小中学校現職研修委員会
筆者が本学赴任以来、研究交流と情報交換を行っており、研究実践は現在も継続中である。
- ⑦山口県防府市中教研音楽研修部
H25 年度中国四国音楽教育研究大会をめざして本研究に係る授業研究会を 3 回開催し、情報共有を図った。
- ⑧豊田市公立中学校教諭（現在本学附属岡崎小学校） 蕃洋一郎
本学大学院へ現職派遣院生として在籍し、客観的に自身の演奏を振り返るモニタリングの授業への応用について、勤務校の授業実践を通じて検証を進めた。
- ⑨春日井市公立中学校教諭：長江希代子
本学大学院へ現職院生として在籍し、客観的に自身の演奏を振り返るモニタリングについて、生徒や卒業生へ意識調査を行ってその有効性を検証した。
- ⑩名古屋市公立小学校教諭（現在名古屋市公立小学校教頭）：森勢津子
元愛知教育大学附属学校の教員であり、現任校で追実践を行うことで、一般校における応用性と有効性を検証した。

3.2 依頼した実践の概要

実際に研究を進めるにあたり、本研究で模索する鑑賞活動のスタイルについて基本的な考え方を次のように整理し、実践協力者と共有を図っている。

- ①鏡に姿を映すように自分達の演奏を客観的に聴き比べて「気づく活動⇒問題点を考える活動（意識化）⇒問題点を解決する活動（自覚化）⇒演奏へ結び付けて演奏表現を磨き上げる活動（還元）」を一体化することで、「音楽の聴き方、聴く型」の習得をめざす。
- ②自らの演奏を映し出す「鏡」として、録音再生が可能なスピーカー一体型の IC レコーダーを各実験校へ複数台ずつ準備して、グループ活動等で活用する。

③拙著（「改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る！」 Stylenote,2011, p.138）で示した「鑑賞用評価シート」を、子ども達の間で交わされる感想交流や意見交換、アドバイス・タイムの際に、演奏表現と鑑賞の両方の活動において活用する。

なお、ここで示した活動モデルは、筆者の愚見である「学校教育活動の一環である小中学校音楽科の授業では『自己理解の力＋他者理解の力⇒コミュニケーションを確立する力』と『計画立案力（練習の見通しや段取りをつける力）＋問題解決力（必要な知識や技術、それを身に付ける力）⇒自己実現の力』を身に付けさせるべきである」という考え方に立脚している。

3.3 依頼した研究実践で行われる基本的な活動パターン

研究授業で身に付けさせたい「鍵となる力」を、「気づいて意識することで自ら課題を見つけ出す力＋違いや問題点を自覚することで自ら問題解決に取り組む力」と設定し、その基本的な活動パターンとして次のような流れを例示した。ここでは鏡に自身の姿を映しだすように IC レコーダーへ自分たちの演奏を投影することで（“音楽の鏡”として位置づけ）、自らの演奏を客観的に聴く「気づく活動」と、模範演奏を聴き比べながら演奏表現を「磨き上げる活動」の一体化を促すことで、「音楽の聴き方、聴く型」の習得をめざしている。

- ①教材で取り上げた楽曲全体を通して、クラス全体で練習する。
- ②教材で取り上げた楽曲の一部を取り出してグループで練習し、「練習⇒録音⇒再生して聴く」活動を繰り返す。
- ③適宜、模範的な演奏の録音と聴き比べて、自分たちの演奏と何が違うか考えて自ら課題を探し出し、創意工夫や改善に向けた練習を深める。
- ④練習前後の録音を聴き比べ、自ら設定した課題に対する成果を話し合う。
- ⑤話し合いを基にして新たな課題を探し出し、次時に向けた練習計画を考える。

なお鑑賞は曲を記憶することから始まるため、教材には子ども達が慣れ親しんでいる合唱曲を取り上げた。これにより鑑賞と演奏表現の一体化が可能になるため、「聞かせて終わる」だけの劇場型授業や一過性の活動からの脱却を図った。

3.4 依頼した研究実践の検証ポイント

研究実践の検証は、ピンポイントに次の5点に絞って進めた。

- ①子ども達自身による練習の深まりを促す際に、「録音⇔再生・確認」へ取り組ませる声掛けのタイミングや方法、掛ける言葉の分析。
- ②自分達の演奏録音と模範演奏を聞き比べて、その違いを感じ取れない子どもへのアプローチやフォロー、サポートの方法とそのタイミングの分析。

- ③技術指導のタイミング、それを促す働き掛け方やフォロー、サポートの検証。
- ④演奏表現を深めるための教師による指導の度合い、指導の深さの分析。
- ⑤どの学年なら IC レコーダーを「音楽の鏡」としてどこまで活用し得るのか？、何をどこまで自分自身で気付くことができ、自分たちで解決できるのか？、これらを発達段階ごとに確認する。

4. 研究実践の事例紹介

実践協力で得ることのできた事例のうち、代表例として森勢津子教諭によって小学校 4 年生を対象として行われた実践と、蕃洋一郎教諭によって中学生を対象として行われた実践を紹介する。さらに、全ての事例を基に考察を進めることで明らかにされた事項と、今後に向けた問題点を整理しておく。

4.1 小学校 4 年生を対象とした実践

- ①実践協力者：名古屋市立 C 小学校、実践者：森勢津子
 - ②実践対象学年：小学校 4 年生
 - ③歌唱教材：「もみじ」（文部省唱歌、高野辰之作詞、岡野貞一作曲）
鑑賞教材：ヘンデル作曲「水上の音楽」より「アラ・ホーンパイプ」
スピーカー一体型ポータブル IC レコーダー：4 台（パートに 2 台ずつ）
 - ④結果：児童の意見交換やグループ間のアドバイス・タイムにおいて、クラス全体で気づくことのできていることが確認された音楽構成要素は次の 4 点である。
 - ・旋律ラインにおける音の動きや音高の変化（発言例：だんだん音が上がっていく、低い音で動かない、など）
 - ・各パートの入るタイミング、テクスチャの出だしのタイミング（発言例：追いかけてこ、一緒にうごく、など）
 - ・声量や音量のバランス：（発言例：おいかけこの部分の声の大きさ、上と下のどちらのメロディーを大きく歌うのか、など）
 - ・音高の正確さ、音の間違い（発言例：音の間違いを指摘するもの）
 - ・声質や音色（発言例：前半はやさしい声で後半はどうどうとした声で、など）
- 実践前は、「楽しかった」「好き」「きれい」「ウキウキした」などの情緒や好き嫌いに類する記述や、「いっしょうけんめいやった」「がんばった」などの意欲・関心・態度に関わる発言やアドバイスが大部分を占めていたのだが、実践後は音楽構成要素に繋がる言葉や意見、アドバイスも現れるようになり、それをキーワードにした意見交換もクラス全体でできるようになった。このことから、鑑賞曲を聴かせながら教師から要素へ注意を向けた

り意識させたりするように適切な声掛けが行われることに加えて、児童の歌声に対しても同じように要素に関わる言葉を用いて適切な指導が継続して行われことにより、音や音楽を形づくる「もと（元・素・基）」に意識を向けることができ、それらに気づき、それらを感じ取ることができるようになると考えられる。

4.2 中学生を対象とした実践

①実践協力者：豊田市立 T 中学校、実践者：蕃洋一郎

②実践対象学年：中学校 1 年生、および 2 年生

③合唱教材：「Let's search for Tomorrow」（堀徹作詞、大澤徹訓作曲）1 年生
「夏の日の贈りもの」（高木あきこ作詞、加賀清孝作曲）2 年生
「夢の世界を」（芙龍明子作詞、橋本祥路作曲）2 年生

鑑賞教材：シューベルト作曲「魔王」1 年生

バッハ作曲「フーガト短調」2 年生

スピーカー一体型ポータブル IC レコーダー：3 台（パートに 1 台ずつ）

④結果：自己評価カードの記述内容の割合（％）を算出し、グラフ化した。

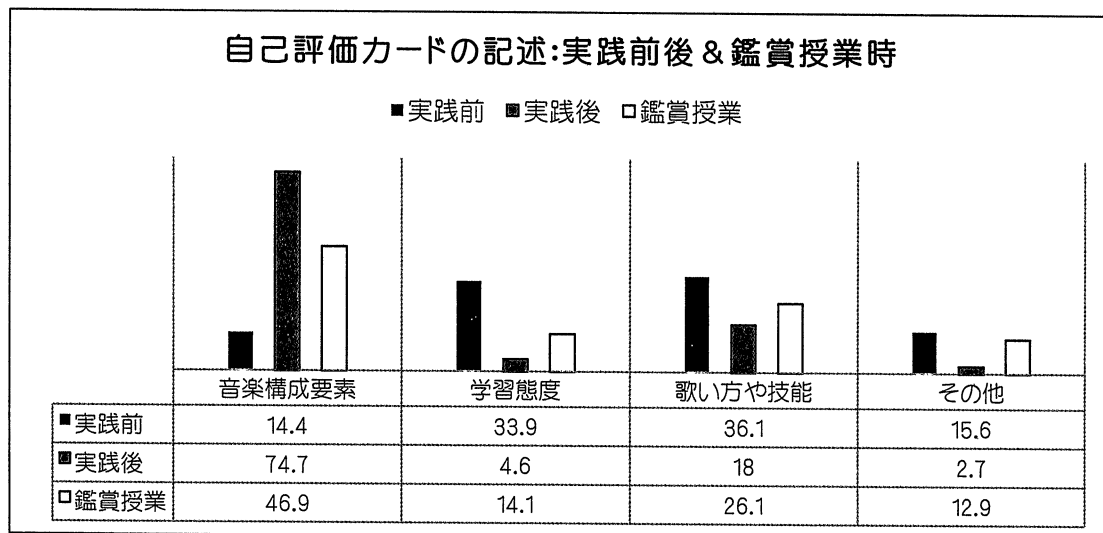
*注：この実践では自己評価カードの書式・内容の工夫も試みられたが、その紹介は別の機会に委ねたい。

【グラフ 1】では、生徒が記述した自己評価カードの内容について、音楽構成要素に関わる記述とそれ以外の記述の割合を算出し、実践の前後で比較している。なお参考として、鑑賞の授業で書いた自己評価カードの割合も添えている。その結果、実践前は「歌い方や技能」と「学習態度」に関わるものが多かったのだが、実践後は要素に関わる記述が全体の 7 割以上を占めている。また、鑑賞の授業で記した自己評価カードも要素に関わる記述が全体の半数近くに及んでいる。

これらのことから、実践前は「頑張って歌えた」や「真面目に練習に取り組めた」「皆で協力してできた」などの「学習態度」に関わる記述が多くを占めていたものが、音楽に注目させて音や音楽の違いや変化に気づかせたり意識させたりすることができると、音楽的な気づきも増えて音楽構成要素に関わる記述も充実することが確認された。

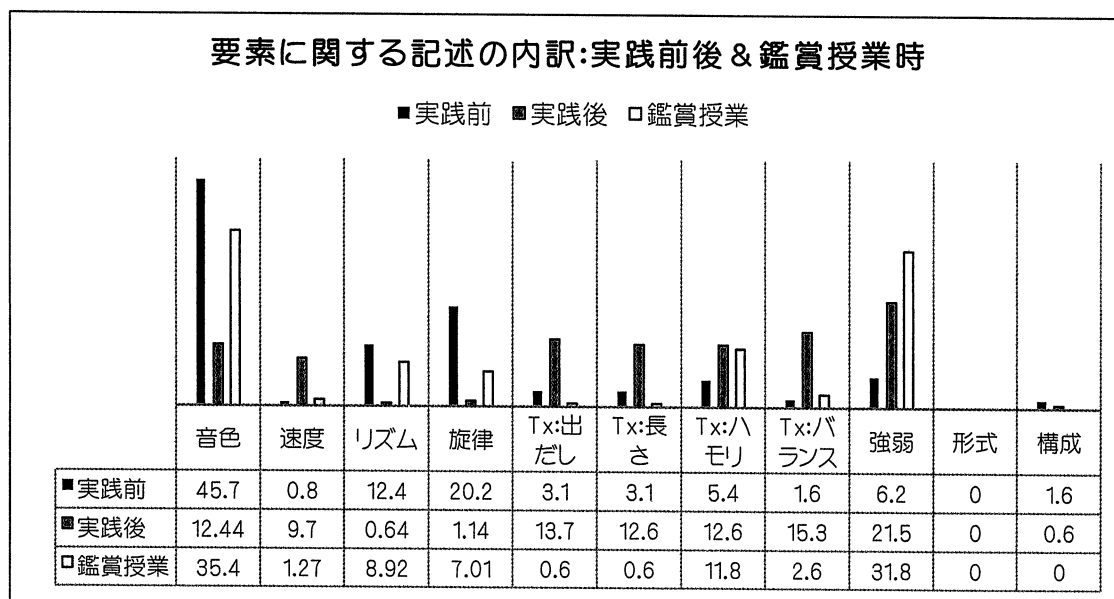
【グラフ 2】では、生徒が記述した自己評価カードの内容のうち、音楽構成要素に関わる記述の内訳を算出し、実践の前後で比較している。参考として、鑑賞の授業で書いた自己評価カードについても要素に関わる記述の内訳を添えている。

[グラフ 1]



* 蕃洋一郎教諭の実践記録を筆者が再分析したもの

[グラフ 2]



* 蕃洋一郎教諭の実践記録を筆者が再分析したもの

実践前は、全体の1割を超える記述が「音色、旋律、リズム」に関わるものしか無かったのだが、実践後は「音色、Tx（テクスチャ）：出だし、Tx：音の長さ、Tx：ハーモニー、Tx：バランス、強弱」の様々な音楽構成要素に着目して記述できるようになっている。鑑賞の授業の際に書いた自己評価カードも、「音色、強弱」に集中しているものの「リズム、旋律、Tx：ハーモニー」に関わる記述も全体の1割前後見られるようになった。

「音の3要素（音色・音高・強弱）」のうち、最初に身に付く能力は「音色（声質）の識別力」と言われている。これは親や身内の声を聴き分けるための「生存に関わる識別能力」の所以であるが、自己評価カードの記述もその音色に関するものに集中していた。逆に、最も身に付きにくい能力は強弱を聴き分けるもので、これは強弱の概念が音色の概念と未分化で分離・区別できていないことから、強弱の変化を音色の変化と誤認識してしまうことに因る。特に歌唱においては、「小さい声／やさしい声」、「大きい声で歌う／怒鳴る・叫ぶ」のように強弱と音色の概念が混乱した例は多い。しかし今回の実践を経て、鑑賞の活動で曲を聴かせながら教師から様々な音楽構成要素へ注意を向けさせて意識を促すような声掛けが行われるとともに、演奏表現の活動でも生徒の歌声に対して要素に関わる多様な言葉を用いて適切な指導が継続して行われことにより、「音や音楽のもと（元・素・基）」へ幅広く意識を向けることができ、様々な音楽構成要素に気づき感じ取ることができるようになると思われる。

このことから、音楽構成要素を拠り所として音や音楽に向かわせることで音楽の違いや変化に気づかせたり意識させたりすることができると、生徒自身の音楽的な気づきの幅や種類も増えて、音や音楽に関する興味・関心も拡がり、結果として要素に関わる言葉や記述も充実することが確認された。

4.3 参考実践の紹介：小学校3年生を対象とした自主実践

直接の実践協力者ではないが、筆者が係わりを持つ岡崎市小中学校現職研修研究会で報告された安藤朗広教諭による自主実践を参考事例として紹介する。

“鑑賞⇒リコーダー⇒歌唱”の活動を通じて「音の強弱や音の伸ばし方（長さ・処理）によって変化する曲想の違いに気づかせることで、自分の出したい音をイメージする」と「録音や聴き合いによって客観的に自分たちの演奏を聴くことで、表現の意欲を高め、音の強弱や音の伸ばし方（長さ・処理）を工夫する」ことを体験させた上で、器楽アンサンブルによってそれらの表現について考え、録音再生を繰り返しながら試行・創意工夫させることを目標とした、鑑賞活動と“器楽・歌唱・器楽アンサンブル”の表現活動を組み合わせた実践である。

①実践協力者：岡崎市立M小学校、安藤朗広

②実践対象学年：小学校3年生

③鑑賞教材：ベートーヴェン作曲「メヌエット」

リコーダー教材：「山のポルカ」（チェコ民謡）

歌唱教材：「一人の手」（本多路津子日本語詞、ピートシーガー作曲）

器楽アンサンブル教材「七つの子」（野口雨情作詞、本居長世作曲）

IC レコーダー

④結果：「楽譜がどうなった時に“はずむ”“なめらか”“もりあがり”があるか分かったか？」というアンケートに、「よくわかった」10/30人、「少しわかった」17/30人、「あまりわからなかった」3/30人であり、多くの児童が楽譜から音のイメージを持つことができるようになった。反省点は次のとおり。

- ・録音や他者の演奏を聴く際、聴き取るポイントを絞り込む
- ・楽器の音色の特徴や演奏の仕方による違いや変化を教師が例示する
- ・音の違いや変化を聴き取れる児童は音の強弱や音の伸ばし方（長さ・処理）を工夫することができたが、そうでない児童は音の間違いやズレに意識が集中してしまったので、違いや変化を聴き取れるような指導を工夫する

5 研究結果に基づく新たな提案

5.1 確認事項の整理

- ①曲を分析的に聴く力を身に付けることは、気づいたことや感じたこと、考えたことなどを伝える言語表現力の成長へ繋がる。
- ②「聞く」ことと音楽を分析的に「聴く」ことを区別させ、その意識を継続させる活動が重要である。
- ③②については、自らの演奏を客観視する「音楽の鏡」を自分の中に持たせることと、その音楽の鏡を絶えず意識しながら模範演奏と自分達の演奏を聴き比べて演奏表現を磨き上げる自己省察を促す活動が重要である。
- ④さらに②については、「演奏」や「聴く」行為そのものが創造的な活動であることを理解させる指導が重要である。つまり音を出すことだけが演奏表現ではなく、音符の並びから音の動きを予想し、頭の中で響かせた音から演奏表現の変化や良さを感じ取ること、表現の活動の一部であること、さらに出した音を聴く行為、頭の中で音を響かせながら楽譜を読み解く行為の全てが鑑賞の活動と結び付いていることを理解させることが重要である。
- ⑤音楽構成要素が演奏表現と鑑賞の両方へ作用していることに気づかせることは、音楽的意味や価値を考えることへ繋がる。その際の活動プロセスとして、次の4つの段階を提案したい。

- [第1段階] 要素に気付く・感じ取る・意識する（要素を知覚し認知する力や、要素に気づき聴き分ける力を身に付ける）
- [第2段階] 要素の良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする（要素を活用して演奏表現や鑑賞の活動を工夫する力）
- [第3段階] 要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える（全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力）
- [第4段階] 気付いて感じたことを自らの演奏へ結び付け、言語・非言語活動を活用して共通理解へ高める段階（説明力や説得力、言い替える力や置き換える力）

5.2 研究成果に基づいて提案する音楽科授業で行う鑑賞活動の在り方

音楽の鑑賞には思考の働き掛けが不可欠であることから、裏づけを伴わない漠然とした詩的物語的な聴き方をやめさせて、音によるメッセージから様々なことを感じ取って想像させる活動、つまり音の塊や羅列に音楽的意味や価値を付加し、感情や情動を呼び起こす仕組みや仕掛けを探り、それを感じ取ることを大切にさせるような活動を提案したい。

その方策として、「質の良いあそび」で身に付けた知覚力を手掛かりとして音楽構成要素（音色・音高・強弱、リズム・旋律・和音）に気づき、感じ取り意識するプロセス、つまり知識として知っている要素と音響現象を結び付けてその良さや働きを自覚する「再構成の活動」を基盤とした学習段階を提案する。

- ①他者や自身の演奏を聴いて音楽構成要素に気づき、感じ取り、意識する段階。（要素を知覚し認知する力や、要素に気づき聴き分ける力を身に付ける段階）
- ②他者や自身の演奏を聴いたり、練習前と練習後の演奏を聴き比べたりして、その良さや働きを自覚し、それを生かしたり際立たせたりする段階。（音楽構成要素を活用して演奏表現や鑑賞の活動を工夫する力）
- ③音楽構成要素同士の係わりや組み合わせによって生まれる効果や働き、要素の組み合わせで形づくられる音楽の仕組みを考える段階。（全体の中で要素の働きや良さを考え、包括的に捉えて再構成する力）
- ④気付いたことや感じ取ったことを自らの演奏へ結び付けたり、言語活動・非言語活動を活用して共有・共通理解へ高めて演奏へフィードバックしたりする段階。（演奏者相互の説明力や説得力）

ここで重要なのは、音や音楽の正体や仕組みを知っていてそれを自在に使いこなせる技術を持っていないければ、より高いレベルで「音楽する」ことには繋がらない点である。つまり演奏者は自らの思いや意図を具現化するために演奏上の工夫を試行錯誤し、聴取者は

その工夫や試行錯誤を読み解くことで演奏者の思いや意図を推理しているため、より高い芸術性や情緒・情操の育成をめざす上では演奏者を育てることと鑑賞者を育てることは相互依存的な関係にあることを理解しておかなければならない。また、音楽構成要素を学ぶには、それ以前に要素へ浸らせ無意識下で音を知覚させ音へ反応させる様々な原体験や前体験が必要であることから、音楽鑑賞でも十分にこの活動を準備するべきであろう。

5.3 研究成果に基づいて提案する音楽科授業でめざすべき目標

演奏や聴くという行為そのものが創造的な活動であることを子ども達へ理解させた上で、自らの音楽的・表現的要求と照合して聴くスタイルの鑑賞活動を通じて次の4点を身に付けさせることを音楽科の目標とするよう提案したい。

- ①「聴き方」や「聴く型・パターン」を知る。
- ②聴く力+分析する力+想像しようとする力。
- ③作曲者が制約の中で工夫した周到な作戦を推理し、理解しようとする。
- ④演奏者が制約の中で工夫した作戦や方策・技術を推理し、理解しようとする力。

5.4 研究成果に基づいて提案する音楽科授業における言語活動の在り方

筆者は、音楽科における学びの一つは「音楽に関する知識と音響的実体を関連付け、体験を通してそれを実感すること」だと考えている。そして音楽科における言語活動とは、言葉や会話、記述などを介在させた音楽に関するコミュニケーションであり、音楽構成要素を巧く適切に組み合わせて自分の思いや意図、演奏表現などを言葉に置き換えて演奏仲間と共有化・共通理解化し、曲を聴いて感じ取り聴き取ったことを他者と話し合い比較するものであることを提案する。さらに、音や音楽から聴き取ったことを体験や体感を伴って言葉と関連付けたり、感じ取ったことを言葉へ置き換えて説明したりする活動を、小中学校9年間に亘って丁寧に積み上げていくように提案したい。

誤解を避けるために補足すると、「言語活動」と言った場合、言語活動と非言語活動の両方を合わせたものを意味する。これは「1と0」「音符（音・note）と休符（沈黙・silent note）」などの「有・在⇔無」の対立共存関係と同じく、そのどちらか一方だけでは存在し得ない。よって言語活動と非言語活動は表裏一体のものとして捉え、「言語化できるもの／言語化できないもの」「言語化すべきもの／言語化すべきではないもの」の両面からセットで考えるべきであろう。

「いい言葉、いい言い回し」とは、何も無いところから湧き出たり閃いたりするものではなく、過去に見聞きした言葉を思い出すものである。子どもの頃に触れた言葉が少ないと語彙が少なくなり表現の幅も狭くなるのと同様、音楽も原体験としてより多くの曲へ浸らせ様々なジャンルの曲に触れさせておきたい。

6. 研究のまとめ

6.1 今後の課題

日々連綿と続けられる教科としての音楽科の在り方と教科再編の議論に曝されながらも粛々と積み上げられる現実の音楽科授業において、演奏表現と鑑賞の活動を一体化することで限られた時間内でより効果的な音楽の授業を実現するために、今後確認しておきたい課題を次の4つに整理しておく。

- ①教師からの狙いを絞った働き掛けが無いと音の“塊”や“連鎖”として聞いてしまい、音を分析的に知覚することができない子どもに対するアプローチ。
- ②音の融合から生じる情動や雰囲気の違いを適切な言葉と関連付ける活動を、計画的に継続する方策。
- ③子ども達だけの力で何をどのくらい気付いて、何をどこまで解決できるのか、発達段階に応じた可能性と限界。
- ④子ども達の試行錯誤と教師からの適切なアドバイスが結び付くことによって、何をどのくらい気付いて、何をどこまで解決できるのか、発達段階に応じた可能性と限界。
- ⑤教師はどのタイミングで、どのような働き掛けをするのが効果的なのか、発達段階に応じた方策。

6.2 今後の「小中学校音楽科授業における鑑賞活動」に期待すること

演奏とは、単に音符を音へ置き換える作業ではなく、自分の音楽的要求というフィルターを通して楽譜を音楽へと再変換することである。そして鑑賞も、漠然と音を耳にするのではなく、自分の嗜好に合った演奏表現を求めながら自らの音楽的要求と照らし合わせて聴くことで心の中に生じる情動の変化を楽しむものである。つまり“演奏”や“聴く”という行為そのものが、既に創造的な活動を行っていることになる。本研究の授業実践では、子ども達がイメージングや思考を伴った活動をコアとしながら演奏表現と鑑賞が一体となった活動によって様々な音楽構成要素に気付き感じ取り、知り、身に付け、改善したいと感じることができるよう活動が模索されていた点と、体験と実感を通じて生徒の中で様々な要素を意識化させ、生徒の中に内在する知識や経験知を生きた知識や演奏技術へと結び付け変換させる工夫が随所に織り込まれていた点を高く評価したい。今後さらに、音の繋がり方（メロディー）や音の重なり方（ハーモニー）、音の並び方（リズム）から形づくられる音楽の良さや、微妙な組み合わせの違いから生まれる響きや雰囲気の変化を、子ども達が意図的・意識的に聴き取るために自ら音や音楽へ向かっていく活動が、演奏表現と鑑賞活動の両面から立案・計画され、実践されることを期待している。

鑑賞の力を総括的に高めるためには、音や音楽と分析的に向き合うよう教師によって継続的かつ計画的に導かれる必要がある。そのためには小学校低学年から日常的に楽譜に触れさせ、楽譜に記された音楽情報（音符や記号、楽語）から「何のために、なぜそこへ記されているのか」、その必要性や必然性を読み解くことが子ども達の習慣になるまで教師が求め続けなければならない。特に客観的思考が可能になる中学校では、「感覚的・情緒的に音楽を捉える活動」と、「冷静かつ分析的に音楽と向き合う活動」とのバランスが大切になる。例えば、歌詞を大切にし、詞の意味やそこへ込められた情感へ迫るのは大前提かつ不可欠なプロセスなのだが、歌詞から読み取れるのは作詞者の思いや意図だけであり、作曲者が込めた思いや意図は楽譜に記された音楽構成要素を読み解くことによるのみ迫ることができる。「詞の解釈（歌詞の読み込み）」と「曲の分析（楽譜の読み込み）」は、両者ともに不可欠かつ全く異なる思考・判断が求められる。よって、小学校では歌詞を拠り所としてイメージを膨らませる活動に浸らせておくことに重きを置くことが大切だが、中学校では楽譜と冷静に向き合って楽譜に記された音符の動きや記号などから音楽構成要素を読み取り、それを基にして作曲者が込めたメッセージ（思いや意図）を思考・判断し、その解釈を仲間同士で話し合ったり演奏表現について打ち合わせたりするような、分析的かつ客観的に音楽と向き合うスタイルの活動も生徒へ体験させることが重要である。

6.3 おわりに

音を出すことだけが演奏表現ではなく、それ以前の楽譜と向き合う段階から既に表現の活動は始まっており、音の動きや微細な変化から曲想の違いや良さを感じ取り聴き取ることも表現の活動の一部である。つまり「音を出す行為」「楽譜を読み解く行為」「楽譜と向き合う行為」の全てが鑑賞の活動と深く繋がっている。このような視点から、演奏表現と鑑賞が一体化して相互作用的に触発し合い、音が融合した瞬間や音の変化から曲想の違いや良さを感じ取ることでできた瞬間に得られる「ぞくぞく体験、わくわく体感」と出逢わせ、子ども達が自らその「ぞくぞく、わくわく」を求めて音楽を聴き音楽と向き合おうとする授業、そして音や音楽を狙って聴きにいかうとする活動が積極的に実践されることを願っている。

今回の一連の研究で求めている力とは、文部科学省が今日的課題の「キー・コンピテンシー」として例示する内容のうち、「知識や情報を活用する能力（他人の意見や選択肢の理解、自らの意見の形成）」「他人と円滑に人間関係を構築する能力」「協調する能力」「利害の対立を御し、解決する能力」などの成長に寄与できるのではないかと考えている。また、社会科や理科・数学の知的活動を主とする教科の教員から「計画的・意図的な対立から合意に向かわせる活動と、納得・妥協を得るための説得や話し合いの活動が、音楽科の

中でも有効である可能性を秘めていることを感じる事ができた」という主旨の意見を寄せられた。今後はそれらの視点から検討をさらに深めていきたい。

* 注：本研究は「学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）23531248・新山王政和」の一部として行ったものである。

[参考文献および資料（副題省略）]

- * 梅本堯夫『音楽心理学』、誠信書房、1966
- * 梅本堯夫『音楽心理学の研究』、ナカニシヤ、1996
- * 梅本堯夫『子どもと音楽、シリーズ人間の発達2』、東京大学出版会、1999
- * 岡田暁生『音楽の聴き方』、中公新書、2009
- * 岡田暁生・安岡洋編『文学・芸術は何のためにあるのか？』、東進堂、2009
- * 國安愛子『情動と音楽』、音楽之友社、2005
- * 兼平佳枝「思考力育成からみた中学校創作授業の現状と課題」、北海道教育大学紀要教育科学編 59、2009a
- * 兼平佳枝「日本の学校音楽教育における音楽的思考の展開過程」、北海道教育大学紀要教育科学編 60、2009b
- * 佐藤正之「音楽はどのように脳に取り込まれるか」ヤマハ音楽研究所、
<http://www.yamaha-mf.or.jp/onkenscope/mind-body/001/02-02.html?fb=140630>
- * 新山王政和、加藤幸子・吉松頼美、太田理恵、石川翼・井垣智恵、「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践Ⅱ－音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み－」、愛知教育大学教育実践開発機構紀要第3号、2013、pp.87－96
- * 新山王政和、矢崎佑、「表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした実践Ⅰ－音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結びつけさせた試み－」、愛知教育大学研究報告第62輯、2013、pp.1－9
- * 新山王政和、「聴き取れないものは表現できないし、真の意味で楽しむこともできない－小学校・中学校における鑑賞に関する試行、1年目のまとめ－」、日本音楽表現学会「音楽表現学」vol.10、2012、p.104
- * 新山王政和、「言語活動を触媒として表現と鑑賞を活発化させる授業の模索－音の羅列を意味のある音の結びつきへ再構築させる試み－」、全日本音楽教育研究会大学部会 2011 年度会誌、2012、pp.22－28
- * 新山王政和、「音楽的成長を導く芽－音や音楽に関する原体験の大切さ－」、岡崎市小中学校現職研修委員会『岡崎の教育』第54集、2013、p.49
- * 新山王政和、「音を出す、楽譜と向き合う、感じ取り聴き取る行為の全てが表現であり鑑賞でもある」、岡崎市小中学校現職研修委員会『岡崎の教育』第53集、2012、p.49
- * 新山王政和『改訂版・新しい視点で音楽科授業を創る！』Stylenote、2011
- * 谷口高士編著『音は心の中で音楽になる～音楽心理学への招待』、北大路書房、2000
- * 坪能由紀子・伊野義博『小学校学習指導要領の解説と展開』、教育出版、2008
- * 茂木健一郎『脳とクオリア』、日経サイエンス社、1997
- * 茂木健一郎『脳と創造性』、PHP 研究所、2005
- * 茂木健一郎『芸術の神様が降りてくる瞬間』、光文社、2007
- * 茂木健一郎・江村哲二『音楽を考える』、筑摩書房、2007
- * R. アイエロ『音楽の認知心理学』（大串健吾訳）、誠信書房、1998
- * D. ドイツェ（寺西立年・大串健吾・宮崎謙一訳）、『音楽の心理学』（上・下）、西村書店、1987
- * J. ハーリー（西村弁作・新美明夫訳）『滅びゆく思考力～』、大修館書店、1992
- * J. ハーリー（西村弁作・原幸一訳）『よみがえれ思考力』、大修館書店、1996
- * J. ハーリー（西村弁作・山田詩津夫訳）『コンピューターが子どもの心を変える』、大修館書店、2000
- * D.G. キャンベル（北山敦康訳）『音楽脳入門』、音楽之友社、1997

- * R. パーンカット、G.E. マクファーソン編（安達真由美・小川容子訳）『演奏を支える心と科学』、誠信書房
- * J.C. ピアス（西村弁作・山田詩津夫訳）『知性の進化』、大修館書店、1995
- * R.E. ラドシー、J.D. ボイル（徳丸吉彦・藤田美美子・北川順子訳）、『音楽行動の心理学』、音楽之友社、1985
- * 季刊音楽鑑賞教育 vol. 1、2010～vol. 7、2011、財団法人音楽鑑賞教育振興会
- * 別冊教員養成セミナー『学習指導要領はこう変わる！中教審答申で読み解く改訂案』、時事通信社、2008
- * 別冊日経サイエンス『脳から見た心の世界』、part1、2005～part3、2007、日経サイエンス社
- * 『最新・初等科音楽教育法』、音楽之友社、2009
- * 『最新・中等科音楽教育法』、音楽之友社、2009
- * Newton ムック『波のサイエンス』、ニュートンプレス、2009
- * 国立教育政策研究所教育課程研究センター報告書「特定の課題に関する調査（音楽）調査結果（小学校・中学校）」、2010
- * 文部科学省『小学校学習指導要領解説音楽編』、教育芸術社、2008
- * 文部科学省『中学校学習指導要領解説音楽編』、教育芸術社、2008
- * 中教審初等中等教育分科会審議記録、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/
- * 中教審初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会配付資料、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/016/siryo/06092005/002/001.htm
- * 蕃洋一郎「自己の演奏と客観的に向き合い、音や音楽を分析的に聴くことのできる生徒の育成をめざした実践的研究」、愛知教育大学大学院修士論文、2012
- * 長江希代子「生徒の心的表現と演奏表現の成長を通して音楽的自立をめざした合唱活動に関する実践的研究」、愛知教育大学大学院修士論文、2013
- * 安藤朗広「楽譜から表現を考え工夫して演奏できる児童の育成」、平成 26 年度岡崎市教育研究大会リポート、2014

[授業研究会等における報告]

- * 西春日井地区教育研究会音楽研究部会、「聴いて、感じて、表現する喜びを求めて～音楽の見える化と聴き比べを取り入れた授業実践を通して～」、尾張教育研究会愛日支部音楽部門 2012 年度研究集会発表プログラム、2012
- * 本学附属名古屋小学校研究紀要、「自己を磨き、学び続ける子の育成」、第 51 号、2012、pp.101－113
- * 本学『大学附属学校共同研究会 2011 年度報告書』、「小中学校教員と共同開発する言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン」、2012、pp.83－93
- * 本学附属岡崎中学校『生き方の探求』研究のあゆみⅠ、「聴き合い、味わい、高め合う」、2012、pp.71－80
- * 本学附属岡崎中学校『生き方の探求～学んだことを行動につなげる～』研究のあゆみⅡ、「聴き合い、味わい、高め合う」、2012、pp.67－76
- * 稲沢市教育研究会音楽部会、「あわせよう、聴きあおう、感じあおう～表現する力と鑑賞する力を高める活動を通して～」、愛知県小中学校音楽教育研究会 2013 年度大会発表プログラム、2013
- * 本学附属名古屋中学校研究紀要、「かわり合いの中で学ぶ授業の創造～言語活動を通して～、聴き感じ取る力を高め表現を構築する力を育む音楽科の授業」、第 52 集、2013、pp.92－105
- * 本学『大学附属学校共同研究会 2012 年度報告書』、「科研費“小中学校教員と共同開発する言語活動で表現と鑑賞を一体化させる音楽科授業プラン”を受けて取り組んだ研究実践 2 年目のまとめ」、2013、pp.70－79
- * 本学『大学附属学校共同研究会 2013 年度報告書』、「各附属学校教員による自主実践のまとめ」、2014、pp.76